

【地域活性化研究】

子育て支援活動「赤ちゃんとお母さんのふれあい広場」 の継続的活動の検討

愛知学泉短期大学 井手 裕子

要 旨

本研究は、愛知学泉短期大学幼児教育学科の教員と学生が地元岡崎市と協働し子育て支援活動を行った2年間の報告を通し、継続的な活動を行うための要素を検討するものである。学生たちは幼児学ゼミナールのメンバーで、乳幼児との触れ合い機会を求めて活動を開始した。企画書作成、教員の研究テーマであるミラーリング、乳児の発達の学修、それを反映させた遊びの施行等、主体的に準備し、臨んだ。その結果、子育て支援と学生たちの学び、特に建学の精神（真心、努力、奉仕、感謝）を発揮しながらの活動ができた。

1. はじめに

(1) 子育て支援の現状

昨今のコロナ禍における親子の遊び場減少や、岡崎市における子育て支援活動の停止措置が続き、親子（養育者と乳幼児）で安心して遊べる場所や、交流の機会が希少となっている。

(2) 愛知学泉短期大学幼児教育学科の取り組み

そのような現状を鑑み、筆者はゼミ活動の一環として子育て支援を行うとともに乳児とのふれあい機会を得たいと考えようになった。

本学幼児教育学科では、岡崎げんき館において乳幼児とお母さんに各ゼミが毎週木曜日にそれぞれの教員の研究テーマに添った遊びの提供を行っている。筆者のゼミも、親子遊びを楽しもう！というテーマで、絵本の読み聞かせ、母親と乳幼児が触れ合える親子遊びや手遊びを提供しながら、発達に合った遊びが家でもできるように活動してきた。この取り組みは、支援活動を兼ねたものであるが、半年に1回の頻度では活動自体で精一杯となり、これが子育て支援活動であるという自覚を得られにくいのが現状である。

学生の実習時にも、乳児とのふれあいの機会を得られないことが多く、卒業までに経験の機会を提供したいと考えたことが理由の一つであった。

(3) 本研究の目的

そこで、昨年度より試みを開始したところ、産学官協働の地域支援は、遊び場の提供と養育者（以下母親と記述する）の悩み相談や打ち明けの場等の提供と同時に、学生（ゼミ生）の現場実践の学力向上にも役立つ、双方にとっての有意義な活動の認識が大切であることが示された（井手、2023¹⁾）。

今年度もゼミ活動において同様の子育て支援活動を行った。これらの活動が継続的に行われるためにはどのようなことが必要であろうか。昨年度の活動と今年度の活動を比較検討し、継続的な活動に必要な要素を検討したい。

2. 方法

今年度の活動を報告し、アンケート調査の比較検討を行っていききたい。

(1) 活動準備のための基礎的な学修

ゼミ活動における本活動は、ゼミ担当者の研究課題であるミラーリングを学修することから開始される。また、1年時で学修した発達心理学、臨床心理学を復習しながら、乳幼児の発達に合わせた遊びを考えた。

a) ミラーリングについて

ミラーリングとは、Winnicott (1971)²⁾が提唱した、養育者(母親、父親、祖父母、兄弟等)が、乳児の感情状態を鏡のように映し出す行為である。感情状態を映し出すというのは、幼児の表情、身体の姿勢、動き方、音などを直観的に真似る行為で、例えば離乳食を乳児に食べさせる時に口を同じタイミングで開けたり(鯨岡(1997)³⁾では「成り込み」と記述)、乳児の「あー」、「うー」等のクーイングに「そうなの・・・」「ふうん・・・」と会話で答えたり、同じように「あー」、「うー」と真似したりすることである。Winnicott (1971)²⁾は、乳児の眼に映る養育者の微笑した目は、「あなたが笑っているからうれしい」、「それでいいよ」、「ここにいていいよ」という無言の応答であり、それが乳児の存在を認めることとなると述べている。

Legerstee ら(2001)⁴⁾は、ミラーリングを、乳児の関心を引く関わり attention maintenance(注意維持)、子どもの感情の適切な映し返しである warm sensitivity(あたたかい感受性)、子どもの発声等への模倣や否定的な感情の調整である social responsiveness(社会的応答)の特徴を持つ関わりとした。そして、3ヶ月時にミラーリング行動の頻度が高い母親の子どもは、頻度の低い母親の子どもに比べ、母親への注視、母親への微笑の映し返しが見られ、月齢とともに注意の共有が増大することを示した。

井手(2016)⁵⁾は、ミラーリングを模倣、注意、実況、代弁に再定義し、これらの行動の頻度が高い母親の子どもは、3ヶ月時の喃語の出現が早く、共同注意等の社会性の発達が早いことを示した。学生たちは、このようなミラーリングの現象をYouTubeから探し、理解を深めた。

b) ゼミの目標

令和5年度のゼミの目標は、「子どもの感性を育む」であった。その為には、まず学生たち自身の感性を磨くことが必要となるとし、自分を知ろう!という観点からバウムテストや風景構成法等の心理テストを行ったり、その解釈を調べたりして自身の特徴を知る機会を持った。

子どもの感性を育むために、ミラーリングを実践的に遊びとして活動のプログラムに取り入れる作業を行った。「リズム遊び」は、ピアノのリズムに合わせてお母さんに抱っこされて歩くことで、歩調を合わせたり、音楽に合わせることの楽しさを味わい、「まねっこ遊び」は、お母さんと一緒に担当者の提示した動物や乗り物を真似する。

c) 発達心理学の学修

ピアジェの発達段階を振り返り、本活動の対象となる乳児の特徴が、感覚運動期であることを再復習した。また、先輩たちの考えた遊びを検討し、感覚運動期の発達に合った関わりの方を模索した。そして、象徴機能を促すように、「カエルさんにご飯をたべさせようね」と言いながらポットン落としをするができるよう、穴をカエルの口に見立てる絵を貼った(図1, 2参照)。



図 1



図 2

(2) 活動準備の流れ

具体的な流れとして、6月に企画書(図3参照)を大学近隣の「岡崎交流センターやはぎかん」へゼミ生全員で持参し、メンバーの顔合わせと説明を受けた。そして、令和5年度は7月20日、8月31日に行うことに決めた。チラシは、昨年度の変更点(日にちと場所)を変え、レイアウトは同様のものを作成し、やはぎかんに置いてもらった(図4参照)。

7月には、おもちゃ作り、プログラム作成、活動のリハーサルを行った。

第1回の活動本番の後、反省会を経て8月(後期授業)第1週目のゼミ活動日に第2回目を行った。

やはぎかん様

企画書

愛知学泉短期大学 幼児教育学科
井手ゼミ

以下の通り、企画・提案いたします。

企画内容
親子支援活動—親子で楽しめる親子遊びと、読み聞かせ、まねっこ遊び、リズム遊び等。

企画効果
お子さんの養育能力の向上
お子さんの子育て支援
ミラーリングを使ったコミュニケーションの促進

・対象
7, 8ヶ月から1歳3ヶ月のお子さん 7人
やはぎかんにお越しになっているお母さんとお子さん

・日時
要相談(木曜日の午前)

・会場
やはぎかんの活動室、もしくは広いスペースが取れる場所

文責 佐々木 真琴

図3 企画書



愛知学泉短期大学 幼児学ゼミナール

赤ちゃんとお母さんのふれあい広場

「子育ては、子どもの個性を育てることをテーマに活動しています。特に、この時期の赤ちゃんの発達に欠かせないお母さまの関わり方も、ミラーリングと称しています。一緒に体験していただき、楽しく赤ちゃんとお遊ばしましょう！」
「子育ての悩み」を話してスッキリ!! (井手准教授(臨床心理士・発達心理師)がお話をさせていただきます)のコーナーもあります。

日時: 2023年7月20日(木)・8月31日(木)
時間: 11:10~12:00

対象: 9~1歳3か月の赤ちゃんとその保護者の方
できれば2日両方の参加が可能な方
(1日のみでもOKですが、ご連絡ください)

会場: やはぎかん 2階

参加費: 無料 保険: 三井住友海上火災レクリエーション保険

定員: 7組

開始期間: 6月12日(月)~8月7日(月) 17:00
先着順にて定員になり次第締め切らせていただきます。

お申込み・お問い合わせ先
お申込み 井手研究室 メール ide@gakusen.ac.jp
親子のお名前、お子様の月齢、性別、お電話番号をお知らせください。

主催: 井手節子(愛知学泉短期大学幼児教育学科准教授)
幼児教育学科 2年井手ゼミ生5名

協力: 西部地域交流センター やはぎかん(子育て交流会事業)

図4 チラシ

3. 結果

(1) 参加人数等

メール予約での参加者は1組であり、1, 2回とも参加された。対応策として、やはぎかんの紙芝居時間に参加した親子に当日声をかけるという方法で参加者を募った。その結果、1回目の参加人数は、5組、2回目は9組であった。昨年度は、すべての参加者が予約であったが、今年度はその場で参加されるというスタイルであったため、アンケートに回答されないで帰宅する親子もいた。

(2) 活動内容

撮影の許可等を取るためのゼミ長の挨拶から開始され、「絵本の読み聞かせ」は動作を交えながら大型絵本を読んだ。「リズム遊び」は、ピアノに合わせて母親が乳児を抱っこして歩くというもので、曲の速さがゆっくりになったり早くなったりと担当者が弾きながら緩急をつけ、リズムを体感できるようにした。「まねっこ遊び」は、「♪まねっこまねっこなになろう♪」という歌(ゼミ生とともに作曲)の後、「〇〇!」となるものを示す遊びである。「うさぎ」なら手を頭に当てて耳の振りをつけ、「飛行機」であれば手を横に広げて飛行機を模す行動を見ながら真似してもらおう。次の「親子遊び」は、家での入浴後など、少しの時間で簡単に触れ合える伝統的な「いっぼんばしこちょこちょ」や、「きゅうりができた」、乳幼児向け番組で放映されている「バスに乗って」などの遊びを提供した。その後、座談会を行い、乳児と少し離れてもらって母たちと教員が話をした。乳児は、ゼミ生が遊びに誘い、母親の見える位置で興味をひくおもちゃで遊んだ。

以下に第1回目2022年度、2023年度活動のプログラムと写真を示す(図5~参照)。

22年9月1日/23年7月20日 やはぎかん活動
1回目 赤ちゃんとお母さんのふれあい広場

あいさつ(撮影の許可)

- 1 大型絵本(だるまさんが)
- 2 リズム遊び
まねっこ遊び(うさぎ、ロケット、飛行機/うさぎ、とり、飛行機)
- 3 親子遊び (きゅうりができた、いっぼんばしこちょこちょ
おふねがぎっちらこ(22)、バスに乗って(23))
- 4 座談会(お母さんたちと井手先生)
赤ちゃんとのふれあい(学生)、手作り玩具での個別感覚遊び

あいさつ

図5 プログラム



図6 絵本読み聞かせ



図7 リズム遊び



図8 まねっこ遊び



図9 親子遊び



図10 座談会



図11 座談会中の託児の様子

(3) アンケート結果の比較

令和4年度の母親へのアンケートに書かれた感想では、「たくさんの方が来てびっくりしていた」、「子どもが楽しそうにしている参加してよかった」、「座談会の中に子どもと遊んでくれて話をしっかり聞けた」等が寄せられた。

令和5年度の第1回目の母親へのアンケートは、全体的には、「まねっこ遊びは難しいと感じたが、物の名前を覚えるのにもいいと思った」、進行については、「まだ歩かない子だと、抱っこで回るのが大変だった。」と書かれていた。また、座談会については「環境の近いお母さん方と話す機会がほとんどないのでお話ができてよかった。」という感想をもらった。

(4) 学生の感想

令和4年度の反省では、母親アンケートで「たくさんの方が来て子どもがびっくりした」ということを受け、立たずにすわって出迎える等、子ども目線を絶えず心掛けることを行った。また、子どもは、発達的に視野が狭いので、おもちゃを顔の近くで見せると注目しやすいこと、音や擬音（ワンワンやコロコロ等オノマトペ）に反応しやすいことを発見し、臨機応変に動くことが必要であると自覚し、2回目に活かした。

令和5年度は、「ピアノをゆっくり弾けなかった」、「座談会中に子どもの誘導ができていなかった」という感想があり、臨機応変さが鍵であると反省していた。それを受け、2回目では、ピアノを自分が思っている以上にゆっくり弾くこと、手作りおもちゃなどで子どもたちをひき

つけることを心がけた。また、母親アンケートで「まねっこ遊びが難しい」という感想があったことから、2回目は遊びの意味（効果）を説明することとした。

(5) 2回目の内容

その結果、以下のような（図12～16）内容となった。



図12 2回目の絵本



図13 2回目のリズム遊び



図14 2回目まねっこ遊び



図15 2回目親子遊び



図16 2回目座談会中のふれあい

(6) 2回目のアンケート結果

上記のような内容で2回目を行った結果、母親アンケートでは全体的には、「色々な遊びが紹介されて面白かった」、進行について、「それぞれの遊びでどんな発達を促すのかを教えていた

だいた点がよかった」、座談会（相談コーナー）では、「他のお母さんの例を聞いてよかった」、いろんな話をきくことができた等の感想が示された。

（7）発表

以上の活動の変化は、本学の学生の活動報告会である「第12回学びの泉グランプリ大会」において発表した。この発表準備において、上記のパワーポイントを作成し、振り返りを行いながら、本学の建学の精神をどのように反映することができたかを自覚することができた。そして、学生の発表は、最優秀賞を受賞した。

4. 考察

本論は、今年度1回目の反省を活かして取り組み、その結果、問題解決がなされ、改善ができたという報告である。なぜこの遊びをするのかという根拠と効果を伝えることによって、母親たちに遊びの意味が伝わったことがアンケートから示された。このような反省と対策、そしてその結果を検証するアンケート調査という地道な取り組みが、学生が地域支援を行うときに非常に大切である。アンケートによって課題解決がなされたかどうかの検証がされるからである。また、先輩たちの反省は第1回目の活動に当然のように活かされており、これが積み重なっていくことで、よりよい活動ができると期待できる。

昨年度と今年度の2回の活動による共通の要素は、活動の根拠となる学修（発達に合わせた関わり、ミラーリングを広めよい子育てをしてもらい姿勢）に裏付けされた実践的な学力、それを活かす社会人基礎力（主体性、実行力、創造力等）、乳児が母親を求めた時や、サークルから出ていくときの臨機応変な対応であった。具体的には、ピアノの緩急など、現場における仕事を想像しながら活動すること、母親に発達と遊びの効果を説明する実行力、座談会中の託児時間の乳児をおもちゃや関わり方で惹きつけながら、一緒に遊ぶ保育力が考えられる。

これらの経験から、学生たちは、仕事に就いた時には、臨機応変に動くことが求められると実践的に理解したようだった。また、子どもとの交流だけでなく、保護者との交流の必要性を実感したようである。子どもとの直接的な関わりを行う他に、遊びの説明をする等、保護者へ説明する力も同様に大切であり、どのような言葉で説明すると母親たちに理解してもらえるかを色々な参考書で調べながら説明文を考える機会を得たことが、就職後に役立つと述べていた。これらは、数回経験した実習からは経験できないことであり、有意義であったと考えられる。

さらに、このような活動における教員の役目は、学生主体でありつつも、それを社会的な活動に広げる援助を行うことであると考えられる。学生は、母親アンケートから自分たちの進行の反省を行い、2回目に対応策を考えて遊びの説明を行った。これは、アンケート調査を行うことを教員が指示したことが奏功したともいえる。このような基本的な進行の指導を行うことは、学生の支援となり、学びにつながることを示されたと考えられる。

5. 今後の課題

以上のように、活動報告を行い、継続的な活動に必要な共通の要素を検討してきた。今後は、先輩たちの反省を踏まえ、その意味を考えながら後輩たちが活動を行うことが望まれる。この積み重ねが、よりよい地域貢献活動につながり、同時に学生にとっての意味のある教育活動ともなり、双方にとっての学びが得られる（井手, 2023）ものとなっていくと考えられる。

附記

本研究は、岡崎大学懇話会の「令和5年度産学官共同研究」の研究助成を受けて実施された。

引用文献

- 1) 井手裕子「保育者養成における子育て支援活動の教育成果と地域貢献に関する一考察」愛知学泉大学『愛知学泉大学紀要』第5巻第2号、2023年、103—112頁
- 2) Winnicott (橋本雅雄・訳)、『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社、1979年 < *Playing and Reality*、Tavistock Publication Ltd, London、1971、欧語の単行本、雑誌
- 3) 鯨岡俊『原初的コミュニケーションの諸相』、ミネルヴァ書房、1997年、83—128頁
- 4) Legerstee M, Varghese J, "The Role of Maternal Affect Mirroring on Social Expectancies in ThreeMonth-Old Infants.", *Chid Development*、2001年、pp. 1301-1313.
- 5) 井手裕子「母親の乳幼児に対するミラーリングと言語発達との関連について」、小児保健協会、『小児保健研究』、Vol. 75 No. 4、2016年、445—452頁

謝辞

本研究は、岡崎大学懇話会令和5年度産学官共同研究の助成を受けて実施したものです。岡崎大学懇話会の皆様に厚く御礼申し上げます。また、今年度の活動に協力して下さったお母さま方、交流センターのスタッフの皆様はじめ、本学の懇話会関係のスタッフの皆様にご感謝申し上げます。さらに本活動に携わり、今年度の「学びの泉」での発表準備に大変努力したゼミ生の皆様に、無限の可能性を顕現できたことを誇りとして今後も活躍してほしいと願います。本当にありがとうございました。